

各位

金蘭千里中学校

本校入学者選抜試験問題に関してのお願い

昨今、教育現場における著作権の在り方が議論されています。本校も、著作権法に基づいた著作物の適切な運用と管理に取り組んでいます。

本校の入試問題の利用につきましても、下記の点にご留意いただき、適切なご利用をお願いいたします。

#### 記

1. 本入試問題の著作権は、本校に帰属します。複製の作成は、事前に申告いただいた場合のみ許諾します。
2. 本入試問題で引用している文学作品等の第三者の著作物は、関係団体を通じて、引用の許諾申請を行っています。

以上

# 令和 8 年度中学入試

## [中期 B・J 入試]

### 国語科 問題

#### 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この問題冊子は、表紙を含めて 24 ページあります。  
  
試験中に、印刷がはっきりしなかったり、ページの乱れや抜け落ちに気づいたりした場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
3. 解答用紙は別に配布されます。解答はすべてその解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は下書きなどに利用してよろしいが、どのページも切り離してはいけません。

[中期 B・J 入試] 受験番号 \_\_\_\_\_

金蘭千里中学校

① 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。問題に字数制限のあるものは、すべて句読点や記号も一字とする。

いきなりですが、「聞く」と「聴く」の違いをご存知でしょうか？

NHK放送文化研究所のホームページには「ただ単に「きく」場合は一般に「聞く」を使い、注意深く（X）、あるいは進んで耳を傾ける場合には「聴く」を使います」と書いてあります。

つまり、「聞く」は Y で、「聴く」は声に耳を傾けること。

「聞く」という言葉は日常的な場面で使われます。「A」とか「A」とか。「aデンプン」なんて言葉もありますが、なんとなく言葉が耳に入ってきたという感じがありますね。

これに対して、「聴く」はもう少し特別な場面で使われます。「B」とか「B」とか。「傾聴」といって、時間をかけて耳を傾けてもらったニュアンスがあるはずですよ。

受動的なのが「聞く」、能動的なのが「聴く」。

あるいは、心理士としての僕なりに定義するならば、①「聞く」は語られていることを言葉通りに受け止めること、「聴く」は語られていることの裏にある気持ちに触れること。

そんなふうに整理してもいいかもしれない。

それでは、「聞く」と「聴く」のどちらが難しいと思いますか？

実を言えば、僕はずっと「聴く」のほうが難しいというか、レベルが高いと思っていました。

僕が専門にしている臨床心理学では「聴く」という言葉のほうがよく使われます。レジエンド臨床心理学者である河合隼雄も『こころの声を聴く』とか『読む力・聴く力』という本を出しています。

ですから、「聞く」は素人でもできる当たり前のことで、「聴く」こそが専門家の高度な仕事なのだ、僕は思っていました。カウンセラーは語られている言葉の奥底に隠れた思いを聴かねばならぬのだ、と。

浅はかでした。

② どう考えたって、「聴く」よりも「聞く」のほうが難しい。

「なんで？」と思われるかもしれませんが。

でもね、「話を聞いてくれない」とは言うけれど、「話を聴いてくれない」と書くとは違和感があると思いませんか？「聞けない」ことは

よくあるけど、「聴けない」というのはすごくレアな例です（イヤホンが壊れたときくらいですかね）。つまり、「なんでちゃんとキいてくれないの？」とか「ちよつとはキいてくれよ！」と言われるとき、求められているのは「聴く」ではなく「聞く」なのです。

そのとき、相手は心の奥底おくにある気持ちを知ってほしいのではなく、ちゃんと言葉にしているのだから、とりあえずそれだけでも受け取ってほしいと願っています。

言っていることをbママに受けてほしい。それが「ちゃんと聞いて」という訴えうったの内実です。

これが本当に難しい。僕らにはどうしても相手の言うことをママに受けることができないときがあるからです。

たとえば、「愛している」と言われて「この人、遺産狙いねらなんだろうな」と思うとき、僕らは真意を読み取ろうとして、目の前まへにある言葉を無視しています。

あるいは、「あなたの言葉に傷ついた」と言われて、すぐさま「でも君にも問題があつてさ」と考え始めるとき、僕らは相手の言葉を一瞬いっしゆんで跳ね返はしています。

僕らには聞きたくないときがあり、聞く余裕よゆうがないときがある。「聞く」は声が耳に入ってくることだから簡単そうに見えるけど、僕らはしばしばその耳を塞ふさいでしまうのです。

「聴く」よりも「聞く」のほうが難しい。

心の奥底おくに触れるよりも、懸命けんめいに訴えられていることをそのまま受けとるほうがずっと難しい。

ならば、どうしたら「聞く」ができるのか。これがこの本の問いです。

実を言うと、これまで僕は「聴く」にばかり気をとられて、「聞く」について真剣しんけんに考えてきませんでした。

「聞く」は心理士として仕事をするうえであまりに当たり前のことでしたから、たとえば「話の聞き方」を教えるなどと言われると、素人臭くさい質問しつもんだなあとすら思っていたのです（ああ、浅はかだ）。

考えが大きく変わったのは、2020年に朝日新聞で「社会季評」を連載れんざいするようになってからです。3カ月げつに一度、そのときどきの社会について評論を書かねばならなくなったのですが、そういう目で社会を見ると、「聞く」の不全ぜんばかりが目めにつきました。

今もそうかもしれませんが、そのころ社会にはさまざまな（注1）イシューがあり、それらについてさまざまな声こゑが上がっていて、深刻な対立たいりつのcヨウソウようそうを呈ていしていました。

ですから、「対話が大事」と至るところで語られていたわけですが、僕ぼくの目から見るかぎり、対話はうまくいっていませんでした。

言葉と言葉は岩石のように、ぶつけあうものになっていました。硬くて、強い言葉が投げつけられ、お互いを傷つけあう。必要だったのは、お互いを理解して、納得のいく結論を出すことなのに、どうにもそれが難しくなっていた。

③ 声上がる。だけど、聞かれない。

深い思いを汲み取ってもらえないのではなく、「それは嫌だ」と言っているだけなのに、言葉通りに受け取ってもらえない。

その結果、社会の亀裂はどんどん深まっていく。僕が目にしたのは、そういう風景だったのです。

ですから、この時期に僕が書いた評論は、徐々に「聞く」をめぐるものになっていきました。

意識的に「聞く」をテーマにしようと思ったわけじゃありません。心理士として社会に何を言えるかを考えたときに、話はおのずと「聞く」に（注2）収斂していったのです。

なぜ僕らの社会は話を聞けないのだろうか。

④ ながら、同じことを考え続けることになりました。

評論を書きながら、心理士として社会というものをどう考えるか、きわめて素朴なものではあるにせよ⑤「社会哲学」と言えるようなものが、僕の中に輪郭を持ち始めていました。

とはいえ、その段階では連載を続けるのに必死で、「聞く」についての本をまとめようとは思っていませんでした。

d テンキとなったのは、2021年の終わりに朝日新聞社で行われたオンラインイベントです。「社会季評」で書いてきた「聞く」論について、担当記者であった高久潤さんに話を聞いてもらい、新聞読者たちからの質問に答えるという会でした。

まったく予想外なことに、参加者は1000人近くも集まり（僕はせいぜい100人くらいと思っていた）、「聞く」に強い関心が寄せられていることをはじめて実感しました。

参加人数だけじゃありません。なにより驚いたのは150件近く寄せられた質問の中身でした。

政治家や経営者の話の聞かなさ、地域社会でのつながりの減少、日本社会において聞かれていないマイノリティの声、社会における「聞く」の不全についての質問はもちろんたくさん寄せられました。会の趣旨がそういうものだったので当然です。

でも、それだけじゃなかった。

家族に心の病気の人がいるのだけど、どうやって話を聞けばいいのか？

職場の部下のことを心配しているのだが、どう声をかければいいのか？

身近な人が自分のことをわかってくれない、どのような話し方をすればわかってくれるのか？

日常の中で、話を聞くことができずに困っている人たちと、話を聞いてもらえずに苦しんでいる人たちが、多数の質問を寄せていたので

す。

⑥ 「聞く」の不全。

それは社会全体が病んでいいる問題でもあり、個々人が苦悩している問題でもあったのです。「聞く」はマクロとミクロの両方にまたがる切実な問題でした。

ならば、心理士である自分にも、なにかできることがあるのではないか。

だって、それこそが、僕が日々の臨床で扱っている問題そのものなのですから。

夫が聞いてくれない、妻の言っていることがわからない、子どもが何を考えているか理解できない、親が何もわかってくれない。

「それは嫌だ」と何度も何度も言っているのに、あの人は全然聞いてくれない。

僕の日々の仕事はうまくいかない「聞く」について、ああでもない、こうでもない話し合い、(注3)クライアントの日常に⑦「聞く」を回復することにあります。

よく考えたら、僕は「聞く」の専門家でもあったのです。

今まで「聴く」の陰に隠れていた「聞く」の価値が、にわかには浮かび上がって見えてきました。

「聞く」の不全と「聞く」の回復。

なぜ話を聞けなくなり、どうすれば話を聞けるようになるのか。あるいはどういうときに話を聞いてもらえなくなり、どうしたら話を聞いてもらえるのか。

これがこの本のテーマです。

「話の聞き方」について書かねばなりません。

素人臭いとか言っている場合じゃありません。

心理士の世界には、ある程度「聞く技術」が蓄積されています。

僕らの仕事はともかくにも、話を聞かないとはじまらないので、クライアントが話をしやすいように、あるいはしやべりにくいことを話せるように、ちょっとした技術があります。

実はこれが案外、本には書かれていないんです。

(中略)

ただし、本当の問題はその先にあります。

そうですね？

「なんでちゃんと聞いてくれないの？」と訴えられているとき、小手先の「聞く技術」では、どうにも対応できません。カウンセリングでも同じです。「聞く技術」が役に立つのはeヘイジであって、本当に深刻な問題が生じて、「聞く」が試ためされているときには、小手先では歯が立たない。

「聞く」が不全に陥おちいるとき、実際のところ、僕らは聞かなくやいけないと思っっているし、聞こうとも思っています。

それなのに、心が狭せはまり、耳が塞がれてしまって、聞くことができなくなる。自分ではどうしようもできなくなってしまう。

これこそが、問題の核かくしん心です。

ならばどうしたらいいか？

結論から言います。

聞いてもらう、からはじめよう。

あなたが話を聞けないのは、あなたの話を聞いてもらっていないからです。心が追い詰つめられ、脅おびやかされているときには、僕らは人の話を聞けません。

ですから、聞いてもらう必要がある。

話を聞けなくなっているのには事情があること、耳を塞ぎなくなるだけのさまざまな経緯けいゐがあつたこと、あなたにはあなたのストーリーがあつたこと。

そういうことを聞いてもらえたときにのみ、僕らの心に他者のストーリーを置いておくためのスペースが生まれます。

「聞く」の回復とはそういうことです。

⑧「聞く」は「聞いてもらう」に支えられています。したがって、「聞く技術」は「聞いてもらう技術」によって補われなくてはなりません。

「聞いてもらう技術」？

ふしぎな言葉に聞こえるかもしれません。その感覚をぜひ覚えておいてください。このふしぎこそが、「聞く」のふしぎさであり、そして「聞く」に宿る深いちからであって、この本でこれから解き明かしていく謎なぞであるからです。

(注1) イシュー……問題の争点。

(注2) 収斂しゅううれん……一つの要素にまとまること。

(注3) クライエント……カウンセリングを受けに訪おとずれる人。来談者。

(一) 波線部 a～e のカタカナを漢字に直しなさい。

a デンブン                      b マ(に受けて)                      c ヨウソウ                      d テンキ                      e ヘイジ

(二) Xに入る最も適切な慣用句を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 足を向けて                      イ 目をこらして  
ウ 腰こしを上げて                      エ 身を入れて

(三) Yに入る最も適切な語を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 声がしっかり耳に残ること                      イ 声が相手の耳に届くこと  
ウ 声が耳に入ってくる                      エ 声が十分に響ひびき渡ること

(四) A・Bに入る最も適切な語句をそれぞれ次のア～エの中から二つずつ選び、記号で答えなさい。なお設問の都合上、「聞」

「聴」はそれぞれカタカナに改めてある。

ア あの曲をキいてると、いろいろ思い出すよ  
イ 部長って全然キいてないよね  
ウ 部長にちゃんとキいてもらったよ  
エ さっきキいたんだけど、また株価が下がったらしいよ

(五) 傍線部① 「聞く」は語られていることを言葉通りに受け止めること、「聴く」は語られていることの裏にある気持ちに触れること

とあるが、この定義はNHK放送文化研究所のホームページの定義とどのような点で異なっているか。その説明として最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア より正確な定義をしている点。

イ より客観的な見方をしている点。

ウ より腑に落ちる説明をしている点。

エ より人の気持ちを重視している点。

オ より科学的な根拠を持っている点。

(六) 傍線部② 「どう考えたって、「聴く」よりも「聞く」のほうが難しい」とあるが、なぜそのように言えるのか。その説明として最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア お互いの意図を探ろうとするあまり、言い合いになってしまうから。

イ 忙しさのせいで相手の話を聞く余裕がないときがあるから。

ウ 心の奥底にある気持ちだけでも受け取ってほしいと相手が求めているから。

エ 言われていることをそのまま受けとることが思いのほかできないことだから。

オ 語られていることの裏にある気持ちに触れようとするのは難しいことだから。

(七) 傍線部③ 「声が上がると、聞かれない」とあるが、これはどのような社会か。その説明として最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 社会の問題に対して声を上げる人間がいても、聞き届ける必要のない社会。

イ 社会の問題に対して様々な意見が上がっても、何も実現がされない社会。

ウ 社会の問題に対して言葉を交わしても、お互いを理解することができない社会。

エ 社会の問題に対して納得のいく結論を出しても、亀裂が深まっていく社会。

オ 社会の問題に対して自分の思いを投げかけても、取り合ってもらえない社会。

(八) ④ には、「様々な方法を試みる」という意味の慣用句が入る。「手」から始まるその慣用句を九字のひらがなに変え、後の文に続く形で書きなさい。

(九) 傍線部⑤「社会哲学」と言えるようなものが、僕の中に輪郭を持ちはじめていました」とあるが、筆者の考える「社会哲学」とはどのようなものか。その説明として最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 心理士として社会の問題を解決できるよう、人々の相談に応じるもの。
- イ 評論家として社会の理想を問いかけ、実現を目指して議論するもの。
- ウ 心理士として社会の問題を投げかけ、人々の質問に答えていくもの。
- エ 評論家として社会の理想を考え、新聞の連載などで論じていくもの。
- オ 心理士として社会の問題を捉え、その実態について考えていくもの。

(十) 傍線部⑥「聞く」の不全」とあるが、例えばどのようなものか。その例として誤っているものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 身近な人に相談しても自分の悩みを理解してもらえないというもの。
- イ 心の病気の家族に対して話を聞いてやれる余裕がないというもの。
- ウ 日本社会におけるマイノリティの声が全体に届かないというもの。
- エ 職場の部下にどんな挨拶をしたらいいのかわからないというもの。
- オ 政治家や経営者が国民や労働者の話を聞いてくれないというもの。

(十一) 傍線部⑦「聞く」を回復する」とあるが、例えばどのようなものか。その例として最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 相手が全然話を聞き入れてくれないという訴えに対して、相手を納得させるための技術を教えるというもの。
- イ 妻の言っていることがわからないという訴えに対して、妻の言葉を素直に受け取れるよう夫と話し合うというもの。
- ウ 夫が話を聞いてくれないという訴えに対して、きちんと話を聞くように夫側へ専門家として指導するというもの。
- エ 親が何もわかってくれないという訴えに対して、親子の喧嘩を取りなしてお互いの関係回復に協力するというもの。
- オ 子どもが何を考えているか理解できないという訴えに対して、子どもの考えを聞き取って親に伝えるというもの。

(十二) 傍線部⑧「聞く」は「聞いてもらう」に支えられています」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「聞く」を回復するためには、相手の話に耳を傾けるための技術を身につける必要があるので、まず話を聞いてもらうことによつて相手のために技術を学ぼうとする意欲を持つことができるということ。
- イ 「聞く」を回復するためには、相手の事情を考えながら話を聞く必要があるので、話を聞いたり聞いてもらったりすることによつてお互いの事情を理解した上で話を進めることができるということ。
- ウ 「聞く」を回復するためには、相手の話を聞く余裕がなければいけないので、まず自分が話を聞いてもらうことによつて相手の話を聞こうとする心を持つことができるということ。
- エ 「聞く」を回復するためには、相手が話をしやすいように聞くための技術を習得しておく必要があるので、まず話を聞いてもらうことによつて相手から会話の技術を学んでおくことができるということ。
- オ 「聞く」を回復するためには、相手の話を聞こうと思つても聞くことができない状況があることを知る必要があるので、話を聞いてもらうことによつて相手の多忙さを把握することができるということ。

② 次の話は、港町にある野亜高校二年生の「僕」（チカ）、石館恭平（キョンへ）、そして一年生の増子耶寿子（マスヤス）の所属しているイーハトー部（宮沢賢治を研究する同好会・顧問は郡司先生）での人間模様を描いた話である。次の一〜四の場面の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一 夏合宿にて、チカ・キョンへ・マスヤスがグラウンドで花火をする場面

僕らはちようどグラウンドの真ん中で線香花火をした。本当は花火も夜に騒ぐことも禁止だから、静かに、静かに、朱色の玉が地面に落ちて完全に消えるのを見守った。

最後の花火を誰が持つか、三人で賢治さんの作品名を挙げつづける山の手線ゲームをした結果、意外にもキョンへが勝った。点火棒で火をつけると、さっそく線香花火がパチパチと爆ぜはじめた。

その小さな火花で頬をオレンジ色に光らせて、キョンへが口を開いた。

「『度十公園林』——」

「もう山の手線ゲームは終わったよ」

「いや、単純に質問で。みんなはこの話を読んだことあるのかな、って」

僕とマスヤスがうなずくのを見て、キョンへは眼鏡を押し上げ、頬を引き締める。

「あの話さ、出だしに度十という主人公の様子が書いてあるだろ？ 俺は読んですぐ、度十がウチの弟に似てるって思ったんだ。いつも笑ってて、その脳天気にも笑ってる姿を周囲に嗤われる感じが、とても」

話しながら、潤平君を思い出したんだろう。キョンへはぐにやつと顔を歪めた。声が震えないよう力を込めたのか、いつもより大きな声が出る。

「両親が度十を大事に思っているところも、我が家と似ていた。潤平は明るくて素直で謙虚でホント気のいいヤツだったし、ダウン症で心疾患があり、長くは生きられないだろうって医者に言われつづけてきたから、両親はありったけの愛を注ぎたかったんだと思う」

僕は通夜の会場で壁を越えて聞こえてきた（注）慟哭を思い出す。

「違ってたのは、兄貴だよ。俺は度十の兄のように弟を見守ったり、弟の味方をしたりできなかった。むしろ、いつも弟に腹を立ててた。どうして俺の弟は『普通』じゃないんだって。何をしても悪目立ちして、そのことを恥じるでもなく①ニコニコ笑ってる潤平が——大嫌

いだったんだ」

キヨンへが強い言葉を押し出すように告白したとたん、線香花火の火が落ちた。静かな闇がおりてくる。

「友達に弟をからかわれるのが嫌で、同情や好奇の目で見られるのはもつと嫌で、いつしよに外出することは極力避けたし、避けられない時も絶対に並んで歩かなかった。他人のふりをしてたんだ。弟だってバレた時は、率先して謝ったよ。＼ごめん。ウチの弟ヘラヘラして。おまえらのことを笑ってるわけじゃないんだ。ちよつと足りない、めでたいやつなんだ＼って。潤平がいつも笑っていたのは、俺が見過ごすほどささやかな自然の変化や身のまわりのものの美しさや人のやさしさに気づいて感謝できるからだって、本当は知ってたのに。空気も状況もまるで読めない低脳なやつだって、自分の弟を蔑んでみせた」

隣にしゃがんだマスマスがぐすつと鼻をすすった。

(中略)

「俺は弟の存在を隠したいがために、知り合いの誰も来ない遠くの高校に進学したんだ。その学校の図書室で、本ソムリエからすすめられた本に収録されていた『虔十公園林』と出会った時、俺は自分の愚かさを突きつけられた気がした。宮沢賢治は俺みたいな性根のねじ曲がった狡い人間に向けて、己の薄汚さを思い知らせる話を書いてるんじゃないかと怖くなった」

同時に賢治さんのことがもつと知りたくなって、キヨンへはちようど僕に誘われたのをいいことに仮入部したのだと打ち明けた。仮にしたのは、去年の秋の時点ですでに潤平君が入退院を繰り返していたからだ。最期の日々をいつしよに過ごすために、いつでも部活を辞めたり休んだりできる立場でいたかったんだらう。

「『風の又三郎』を家に持って帰ったら、表紙のかわいい絵のせい、か、潤平が興味を示した。俺はそういうシヨックを受けたあとだったからだろうな、柄にもなく読み聞かせなんてやつちやつて。そしたら潤平が喜んで、何度も何度も『読んで』ってまとわりついてくるわけ」

「貸出期間の間は」

「貸出期間の a エンチョウはしなかったのか」と僕も聞く。

「できたけど、しなかった。本屋で買おうと思えばいつでも買ったのに、買わなかった。家にあると、潤平にずっと読まされると思ったから、面倒だったんだ」

キヨンへは早口で言ったあと、声を震わせた。

「結局、最期まで俺は、弟にやさしくできなかった。郡司先生の家族みたいに、潤平が『普通』だって最後まで思えなかった。潤平に不

足と不満ばかり感じて——もつと「普通」の弟だったらよかつたのにつて、\*のあいつを一度も認められないまま、亡くしちゃったよ」  
声が闇に吸い込まれていく。キョンへの荒くなつた息づかいだけが残つた。僕はたまらず口をひらく。

「でも、キョンへはずつと看病してたんだけ。潤平君の具合が悪くなると、すぐイーハトー部を休んで、弟のそばにいてあげたじゃないか」

「ただ家にいただけだ。看病なんかしてない。六月に倒れてからあいつの意識はずつとなくて、俺は潤平が自分を恨んだまま死ぬんじゃないかとビビつてた。あいつの顔を見るのも怖くて、入院先の病院には行かず、かといってイーハトー部の活動や他の学校生活にも集中できず、ただ毎日まっすぐ帰宅して、家でぼんやり過ごしてた。それで、とうとう潤平が危篤だつて両親に呼び出された時に、潤平の好きだつた『風の又三郎』の本のこつとをやつと思ひ出して、あわてて野亜高まで借りに走つたんだ」

「それが、終業式の日か」

僕はあの日のキョンへの異様な様をありありと思ひ出す。見た目も言動も別人に思えるほど、キョンへは憔悴しきつていた。

「そう。野亜高から本を抱えて直接病院に走つて、意識のないあいつの耳許で読んでやつた。そしたらあいつ、ちよつとだけ持ち直してさ。いや、意識はないままだったけど、危篤状態は一時的に脱したんだ。だから俺、それから毎日『気のいい火山弾』を読んだ。潤平の意識が戻ることを祈つて、読みつづけた。けど、ダメだったな。潤平はどうとう俺と目を合わすことも話すこともなく逝つちまつた」

キョンへは眼鏡のブリッジをギョツと鼻根に押しつけ、くぐもつた声をあげる。

「俺は何もかも遅くて、何もかも間に合わない。最悪の兄貴だ」

(中略)

「やつぱり線香花火だけだと、寂しいですね」

マスヤスの声が響いたと思つたら、パツと周囲が明るくなる。マスヤスがスマートフォンライトをつけていた。そのライトの丸い光の中に、マスヤスの手に握られた筒状の花火が見える。

「それ、もしかして打ち上げ花火か？」

「はい。線香花火を買つたら、おまけで一つ付いてきました」

「おまけは持つて帰れ。校庭から打ち上げちゃつたら、さすがに近隣にバレるだろ。マズイつて」

キョンへの早口を制するように、マスヤスはさらに早口で言った。

「だいじょうぶですよ。この打ち上げ花火、光るのはほんの一瞬。音もそんなにしないタイプなんで」

唸りながら腕を組むキオンへに、スマートフォンライトをつけたままマスヤスが向き直る。

「②わたし、度十と潤平君がずっと笑顔でいられた理由を知ってます」

「理由？ 何だよ？」

「どちらも家族の愛を知っている子どもだから、根っこに愛があるから、他人の冷たい言葉や深刻な窮地にもブレず、笑えただと思  
います」

キオンへはマスヤスのその返答を息を詰めて聞いていたが、途中から顔が歪んだ。

「両親はともかく、俺は愛なんて——」

「潤平君に両親を独り占めさせてあげたことが、キオンへ先輩の潤平君への愛です」

マスヤスの断言に、キオンへの喉が締まったようにキュウとなった。もともとの早口がさらに早くなる。

「俺は別に——潤平は小さい頃から体が弱くて、日常生活を送るのに何かと両親のフォローが必要だったんだよ」

「だから我慢したんでしょう？ キオンへ先輩だって小さかったのに、寂しいとか一言も言わずに、不満があっても耐えたんでしょう？

それがお兄ちゃんの愛じゃなくて何なんです？ 潤平君は気づいていたと思いますよ。お兄ちゃんの愛をちゃんとわかって、笑っていたんです。それが、自分にできる精一杯のお礼だから」

「郡司先生も、いつも笑顔だよな」

僕のつぶやきを聞いて、キオンへは立ち上がった。黙ってマスヤスから打ち上げ花火を受け取ると、校庭の端まで歩いていく。そして僕らが声をかける間もなく、地面に立てて火をつけた。

花火が真っ黒な空に打ち上がる。bシヨウオン機能が働いているようには思えなかったけれど、そもそも個人で楽しむ打ち上げ花火ゆえ、一発あがって、両手に収まるくらいの虹色の花を咲かせると、あっけなく闇へと帰っていった。辺りが黒く沈んだあとも、キオンへは校庭の端にいる。僕らに背を向けて、星がいくつか見える空を見上げていた。その背中が少し震えているような気がする。泣いているのかもしれない。

——だいじょうぶだよ、石館君。君は何も悪くない。

あの時はわからなかった郡司先生の言葉が、今度はすんなり意味を持って耳に蘇ってきた。

キオンへがいつものへの字口で戻ってくるまで、僕とマスヤスはキオンへの背中を見つづけた。僕とキオンへは来年になれば十八歳で、成人する。だけどキオンへの骨張った薄い背中、大人とはとても言えない頼りなさだ。まだ守る存在の必要な背中だ。それはたぶん僕と

マスヤスも同じだから、キョンへの震える背中をさすってやることなんてできなかった。気づかないふりをして、ただ見つめるしかなかったんだ。

こうしてイーハトー部夏合宿の夜は過ぎていった。僕らは三人とも体のあちこちを蚊に刺されまくったけれど、後悔はしていない。まったくね。

## 二 終業式の日、チカと郡司先生のいる図書室へ突然キョンへがやって来た場面

汗だくのキョンへが息を切らして立っていた。久しぶりに顔を合わせたのが、印象がずいぶん違っている。いつもきっちりセンター分けされていた前髪は幾筋もおでこに張りついていて、ずれた眼鏡の奥の目は血走り、色褪せたTシャツにジャージのハーフパンツという部屋着に近い私服姿だ。キョンへにしては余裕がなさすぎる、と僕は感じた。

野亜高の校則では一応、在校生はいかなる場合も制服で登校することになっているのだが、郡司先生はキョンへの服装を咎めず、いつもの朗らかな調子で声をかける。

「石館君、どうしたの？ 図書室に何か忘れ物？」

「――借りた本があるんです」

そう言うと、キョンへは裸足のまま真っすぐ書棚に向かい、一冊の本を取ってきた。キョンへの長くて細い指が掴んでいたのは、岩波少年文庫の『風の又三郎』。たしか、キョンへがはじめて図書室に来た時に、本ソムリエからすすめられた本だ。キョンへは無言を言わせない調子でカウンターの向こう側にまわり、パソコンの前に立つ。自分で貸出手続きを行うつもりなんだろう。すでに落としてあった電源を、当然の顔をして入れた。

僕はそこでどうとう我慢できなくなり、声をあげる。

「その本を借りるためだけに、わざわざ家からもう一回野亜高まで来たのか？ キョンへの家、耳沢市だろ？ 一時間近くかかったんじゃないの？」

「どうしても、今日読んでやらなきゃダメなんだよ。ウチの近くの本屋には置いてなかった。確実にこの本がある場所は、俺の知る限りここしかなかった」

だから来た、と一息に言っただけで、キョンへは立ち上がったばかりのパソコンを操作した。あつという間に貸出作業が完了する。

「どうも」と頭をさげるのもそこそこに立ち去っていかうとするキョンへを、郡司先生が呼び止めた。

「石館君、どのお話が目当てでこの本を借りるのかだけ、聞いていい？」

キョンへは眉を寄せて振り返る。それはキョンへが全力で他人を小馬鹿にする時の表情だったが、郡司先生はひるまずつづけた。

「岩波少年文庫のそれは、表題作の『風の又三郎』の他にもお話がいくつか入ってるでしょう？ たしか『よだかの星』、『ゼロ弾きのゴージュ』、あと『ふたごの星』も」

「詳しいですね」

僕が思わずもらした感想に、郡司先生は「実は、わたしも結構な宮沢賢治ファン」とニコニコ笑ってうなずいた。

「子どもの頃に読んだこの本を、自分の子どもに買ってあげちゃうくらい好きなんだ」

「——郡司先生って、子どもいるんですか？」

キョンへが虚ろな目で郡司先生を見る。

「うん。小学一年生の息子が一人」

「——どうして」

そうつぶやくと、キョンへはゆらりと体を斜めにして郡司先生を見下ろした。車椅子にのっている人を見るわけだから、視線はどうしたって落ちるんだけど、それにしても嫌な感じだ。まるで見下しているみたいだと、僕の胸はざわつく。当の郡司先生は笑顔のまま「どうして？」と鸚鵡返しして小首をかしげた。

「どうして、のんきに笑ってられるんですか？」

キョンへはそう言い放ち、大きく足を踏みならず。裸足だったけど、その音は大きく響き、床が揺れた。僕の肩はびくりと震え、郡司先生が唾をのむ音が聞こえる。

「郡司先生の子どもは、お母さんが歩けないことをどう感じているのか、一度でも考えたことありますか？ 手をつなぎ並んで同じ歩幅で進むことも、その背におぶすることもできない。常に助けなくちゃいけない。助けなかったら、自分がひどい悪者になった気がする。身内にそんな人間がいる苦しみと哀しみを、先生は考えたことがありますか？」

「キョンへ、やめろ」

たまらず僕が怒鳴る。郡司先生はゆっくりまばたきをしながら、キョンへを見つめていた。

「石館君」としずかに呼びかけて伸ばした郡司先生の細い手から逃れるように、キョンへは本を抱え、背を向けて駆け出す。来た時と同

じく突風とつぷうみたいになっていった。

三 潤平君の通夜が始まる前、チカとマスヤスがキオンへに頼たのまれていた『風の又三郎』を届ける場面

「少年文庫でよかったよ。同じ本でも、がちりした表紙のどでかい単行本は焼け残りちゃうから棺ひつぎに入れられないんだって」  
キオンへは喋りしゃべりつづけた。いつも以上に早口で、冗談じょうだんを言うみたいに軽い。クチョウで。

「岩波少年文庫の『風の又三郎』は、潤平君の好きな本だったんだな」

「うん。そもそも俺がはじめて図書室を利用した時に、本ソムリエにすすめられるままに借りて帰った本だけど、弟に読んでやったら、『気のいい火山弾』がとりわけ気に入ったらしくてさ。また読んでくれて、そのあと何度もせがまれたよ」

僕は『気のいい火山弾』を読んだことがなかったが、マスヤスは知っているらしい。納得したようにならずき、ぼつりとつぶやいた。  
「潤平君も気のいい人だったんでしょね」

キオンへが眼鏡の奥の目を剥いて、マスヤスを見る。そして祭壇さいだんの隅すみまで小走りに駆けていくと、置かれたリュックから一冊の本を取りだして戻ってきた。はい、と僕の手わたに渡されたその本も、岩波少年文庫の『風の又三郎』だ。ただしこっちの背表紙と裏表紙には、野亜高等学校のラベルが貼はられていた。

「悪いけど、チカが返しといってくれよ」

「返却へんきやくは夏休み明けで大丈夫だいじょうぶだけ——」

「これ以上、持っていたくないから」

遮さへるようにこぼれたキオンへの言葉が切実で、僕は口をつぐむ。マスヤスも息をのんでいるのがわかった。僕はうなずき、黒いナイロンのサコッシュに本をしまう。

「わかった。返しとくわ」

キオンへは「悪いね」と掠かすれた声で詫わびたあと、ぼつりとつぶやいた。

「ケンジュコーエンリン」

「何？」

「夏休み前、この本を図書室から借りる時、郡司先生から、『どの話がお目当てか』って聞かれただろ。俺の目当ては、『虔十公園林』」

「兄弟でお気に入りが違うんだな」

僕の何気ない感想に、③キヨンへは顔を歪め、「そうだな」と声を少し震わせた。その反応の意味がわからず顔を見合わせる僕とマサヤスに、頭を下げる。

「今日はありがとう。助かったよ。これ、本のおdグイな」

「あ——うん」

「いや、と言うのは傲慢な気がして、僕は掌てのひらに押し込まれた封筒を受け取った。家族葬そうごにeサンレツさんれつする親族がそろそろ集まり始めているのだろう、キヨンへのスマートフォンが鳴りだす。僕とマサヤスはあらためて初対面の潤平君に祈りと別れを捧げ、キヨンへに見送られてセレモニーホールをあとにした。

#### 四 夏合宿時、郡司先生の夫の和己先生と子どもの律君（小学校一年生）が差し入れを持ってきて帰った後の場面

「郡司先生。あの——俺——」

言葉は途切れ、キヨンへの上体が九十度に折れる。

④先生に失礼なことを言いました。申しわけありませんでした」

和己先生と律君が現れてから、キヨンへの口数が極端きょくたんに減ったことに、僕は気づいていた。郡司先生もそうだろう。車椅子の車輪をキユキュツと鳴らして華麗かれいにターンをきめ、朗らかな笑顔でキヨンへを見上げた。

「私の家族は、ありのままの私を『普通』だと思ってるんだ。手をつないで同じ歩幅で歩けない妻の車椅子を押すことも、おんぶができないお母さんの横を歩くことも、普通の日常だって」

キヨンへの顔が悲しそうに歪んだ。口を開いたが、言葉は出てこない。郡司先生はその声にならない言葉が聞こえたようにならずき、やわらかなクチョウで言う。

「もちろん、夫も息子も別の『普通』を求めたことがあると思う。だからって、私は傷ついたりしない。私だって彼らに、『もう少しデリカシーのある夫だったら』とか『好き嫌いせず何でもよく食べる息子だったら』とか、彼ら自身から離れた『普通』を求めちゃう時はあるから——お互いさまだよ」

だから⑤だいじょうぶだよ、石館君。君は何も悪くないと、郡司先生は静かに言い切った。その言葉の意味が、僕にはわからない。だけ

どキョンへが大きく息を吐き、肩の力を抜いたことは、見ていてわかった。

(名取佐和子『銀河の図書室』より 一部改めたところがある)

(注) 慟哭：悲しみのあまり、声をあげて泣くこと。

(一) 波線部 a～e のカタカナを漢字に直しなさい。

- a エンチョウ      b ショウオン      c クチョウ      d (お)ダイ      e サンレッツ

(二) 一～四の場面の文章を時間の流れに沿って並べ直し、一～四の漢数字で答えなさい。

(三) 傍線部①「ニコニコ笑ってる潤平が——大嫌いだったんだ」について、次のⅠ・Ⅱに答えなさい。

Ⅰ 潤平がニコニコ笑っているのはなぜだと考えられるか。次のように説明した文章の ・ に入るもっとも適切な言葉をそれぞれ本文中から抜き出し、最初の六字を答えなさい。ただし、 は四十六字、 は十三字の言葉を抜き出すこと。

【人が  からだし、それが周りの人々に対して  から】

Ⅱ キョンへはなぜ弟の潤平が大嫌いだったのか。その理由としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 低脳が目立ちたがりなだけなのに、自分は普通じゃない特別な存在だとヘラヘラしてる潤平が許せないの。  
イ 潤平の存在を隠したいがために、遠くの高校に進学したのに、そのことを察せずにまわりついてくるので。  
ウ 本当は兄の自分を恨んでいるのに、そのことを隠してニコニコ笑いかけてくる潤平が心から許せないの。  
エ 潤平が空気や状況を読んで適切にふるまえず、周囲からかわれたり、好奇の目で見られたりするの。

(四)  に入るもっとも適切な語句を本文中から五字で抜き出しなさい。

(五) 傍線部② 「わたし、度十と潤平君がずっと笑顔でいられた理由を知ってます」とあるが、潤平が笑顔でいられた理由としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 危篤になった潤平の耳許で、キョンへが意識の戻ることを祈って『気のいい火山弾』を読んでやっていたから。

イ 潤平の具合が悪くなったとき、キョンへがイーハトー部を休んで、つきつきりで弟を看病したから。

ウ 潤平といっしょに居ることを嫌がりながらも、陰ではキョンへが友だちに取りなしたりかばったりしていたから。

エ 両親が自分をほったらかしにした寂しさに耐えて、キョンへが両親の愛を弟に独り占めさせてやっていたから。

(六) 傍線部③ 「キョンへは顔を歪め、「そうだな」と声を少し震わせた」とあるが、キョンへがこのような反応をしたのはなぜなのか。

その理由としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア お気に入りの違いを指摘されたことで、自分が心の中では潤平を憎んでいたことがバレたのではないかと心配したので。

イ 潤平に対する自分のわだかまりをこれから告白しようとしていたのに、チカがくだらない質問をしてそれを遮ったので。

ウ 素直で謙虚で気のいい潤平に対して、自分は狡く性根のねじ曲がった薄汚い人間であると指摘されたように感じたので。

エ 死んだ潤平を思い出すような『気のいい火山弾』の話はしたくなくて話題を変えたのに、チカがしつこく聞いてくるので。

(七) 傍線部④ 「先生に失礼なことを言いました」とあるが、キョンへはどのような気持ちから郡司先生に失礼なことを言ってしまったのか。

その説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 潤平がいつ病気になってしまおうのか、いつ死んでしまおうのかといった心配や苦しみ。

イ 潤平を助けなくちゃいけない、助けなくちゃ悪者になるといった苦しみや哀しみ。

ウ 潤平に何をしてやればよいのか、常に考えつづけなければならぬ息苦しさや怒り。

エ 潤平を看病するために、進学したかった高校に行けなかったという恨みや憤り。

(八) 傍線部⑤「だいじょうぶだよ、石館君。君は何も悪くない」とあるがなぜなのか。その理由としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア キョンへの自分に対する暴言について、本当はひどく腹を立てているが、キョンへを傷つけないための教育的配慮はいりよから、言葉の上だけで「悪くない」と言っている。

イ キョンへの自分の夫や息子に対する暴言について、妻や母である自分だって夫や息子にひどいことを言うのだから、まったく気にしなくてもいいと言っている。

ウ キョンへの自分に対する暴言について、障害のあるなしに関わらず、愛する相手に自分にとっての「普通」を求めてしまうのは、人間として当たり前のことだから、気にする必要はないと言っている。

エ キョンへの自分に対する暴言について、自分は歩くよりも車椅子の方が楽だし普通だと思っているので、まったく気にする必要はないと言っている。

③ 次のそれぞれの文章を読み、それに続くア～ウがそれぞれ文章に書かれていた内容であれば「○」、書かれていなかった内容であれば「×」と書きなさい。

(一) 日本語はどこからやってきたのでしょうか。具体的に特定の言語が起源だとは考えられておらず、「私があなを愛する」のように主語(S)→目的語(O)→動詞(V)というSOV言語である点はサハリンや千島列島を含めたユーラシア大陸北方の言語と類似していること、たとえば「か」であれば「k」+「a」のように子音+母音、つまり音節が母音で終わるといふ開音節の言語である点は、ミクロネシアなど南方の言語と類似していることなどから、日本の周囲のさまざまな言語の特徴が合わさった言語ではないかと考えられています。

- ア 英語は「I (私) Love (愛する) You (あなた)」のような語順になるのでSVO言語である。
- イ 英語は「cup (コップ)」のように音節が子音で終わることが基本なので閉音節の言語である。
- ウ 日本語にはミクロネシアなど南方の言語の特徴もサハリンなど北方の言語の特徴もある。

(二) 日本の国公立大学を受験するためには主に二つの方法があります。一つは総合型・学校推薦型と呼ばれる受験方法で、年内に大学・学部個別の面接試験や書類審査や小論文試験や学科試験を受け、年明けに大学入学共通テストを受験するというのが一般的ですが、面接試験や小論文試験が年明けの大学入学共通テスト後になる大学・学部もあれば、大学入学共通テストの受験を必要としない大学・学部もあります。もう一つは前期・中期・後期日程と呼ばれるもので、大学入学共通テストを受験してから、大学・学部個別の受験をするものです。この場合、個別試験は英語、数学、国語、理科などの学科試験であったり面接試験や小論文試験であったりします。

- ア 大学入学共通テストを受験せずに国公立大学を受験できる方法がある。
- イ 国公立大学の受験には面接や小論文が必ず必要である。
- ウ 総合型・学校推薦型入試の個別試験は必ず大学入学共通テストの前にある。

(三) マグロは一生泳ぎ続けます。魚はエラから水中の酸素を取り込んで呼吸しますが、マグロは自分でエラを動かさないで、口を開けて泳ぎ続けることでエラに水を送り込み、そこから酸素を取り込んで呼吸せねば、生き続けることができません。また、マグロは比重が水より重いので、泳ぎ続けないと沈んでいってしまいます。一生運動し続けるマグロは血中に酸素を送り込むためのヘモグロビンが多く、そのため、マグロの身はヘモグロビンの色素の色である赤色をしています。

- ア マグロは一生泳ぎ続けないと、呼吸もできなくなるし、沈んでいってしまう。
- イ マグロと同じようにエラから酸素を取り込むことのできる魚は少ない。
- ウ マグロはエラに水そして酸素を送り込むために口を開けて泳ぎ、酸素の色である赤身となる。

(四) 愛知県には飛鳥村という自治体が、内陸県である奈良県には明日香村の中に飛鳥と呼ばれる地域があります。飛鳥村は伊勢湾岸にあり、中京工業地帯に属する臨海工業地帯には多くの工場や発電所があります。飛鳥には飛鳥寺や県立万葉文化館があり、歴史ロマンを求めて多くの観光客がやってきます。なお、日本海には山形県酒田市に属する飛鳥があり、瀬戸内海には岡山県笠岡市に属する飛鳥があります。

- ア 飛鳥という島は山形県と岡山県と愛知県にある。
- イ 飛鳥には奈良県立万葉文化館という施設もあり、人々が歴史に思いをはせに来る。
- ウ 飛鳥は海に面していないが、飛鳥村は海に面している。

【問題は以上で終わりです。】

